

# 稲作情報

## 令和7年産米 総括号

JAえちご中越 さんとう営農センター  
TEL: 0258 (41) 2887

令和8年3月5日

### 県内品質・収量は平年並みも地域・品種間差大

令和7年産米は育苗期間の寡照により苗質が軟弱化したこと、5/10~11の強風とその後の一時的な低温により植え傷みが発生したことから活着はやや不良となりました。また前年にひこばえが多かったほ場では地温上昇に伴うワキ(硫化水素)の多発生により、初期生育が阻害され、分けつの遅延とそれに伴う遅れ穂の発生(穂揃い不良)を助長しました。高次分けつの発生とその後の淘汰から穂数は「やや少」となり、6/29の梅雨明け(平年7/23)以降の記録的な高温・少雨は不稔の発生を助長し、登熟歩合は「やや不良」となりました。その後8月第2~第3半旬の降雨により、高温感受性の高い期間の高温登熟を回避しましたが、早生品種や出穂の早いコシヒカリでは高温の影響により品質低下を招きました。中越地域の作況単収指数は「104」となっていますが、実収量は渇水・干ばつを受けた地域において穂の枯れ上がり・枯死等により収量減となりました。

品種・ほ場ごとに品質低下要因を検証して「異常気象に備えた「丈夫な稲づくり」」を実践することで、JAえちご中越「さんとうブランド米」=安全・安心、高品質・良食味米の安定生産に取り組みましょう!!

#### 1. 【主要品種の1等級比率】 (令和8年1月末現在)

種類	新潟県 (農産物検査協会より)			JAえちご中越	
	1等級比率	前年	前年対比	1等級比率	県差
うるち米	74.7%	77.4%	- 2.7%	85.0%	+ 10.3%
コシヒカリ	75.2%	71.1%	+ 4.1%	<b>86.0%</b>	<b>+ 10.8%</b>
こしいぶき	70.1%	88.6%	- 18.5%	83.8%	+ 13.7%
新之助	99.2%	97.6%	+ 1.6%	99.7%	+ 0.5%
酒米					
五百万石	61.8%	80.9%	- 19.1%	41.2%	- 20.6%
もち米					
わたぼうし	59.5%	87.4%	- 27.9%	38.5%	- 21.0%
ゆきみらい	40.8%	56.6%	- 15.8%	34.9%	- 5.9%
	54.5%	65.8%	- 11.3%	56.3%	+ 1.8%
	13.7%	59.5%	- 45.8%	11.7%	- 2.0%
合計	72.9%	76.3%	- 3.4%	80.3%	+ 7.4%

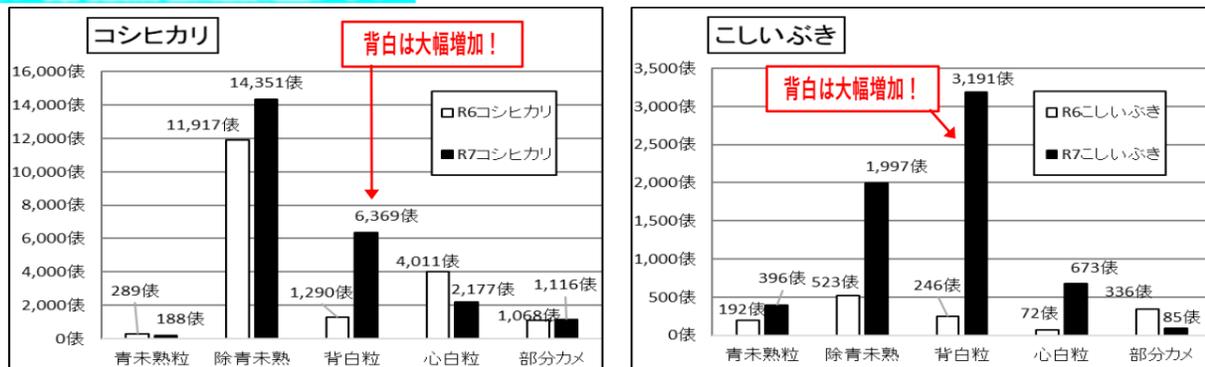
◇ 新潟県全体のコシヒカリ：前年より4.1ポイント上回る

◇ えちご中越のコシヒカリ：新潟県全体コシヒカリを10.8ポイント上回る



主要うるち米の品質は県内でも上位の成績!!

#### 2. 管内格落理由別数量グラフ (コシヒカリ・こしいぶき：前年対比)



- ◆ さんとう地区品種全体で75.8%が「除青未熟」により格落ち
- ◆ コシヒカリ格落理由：前年と比較して「背白粒」の発生が増加
- ◆ こしいぶき格落理由：前年と比較して「背白粒」の発生が増加

登熟期の「高温」の影響により「背白粒」の発生が多い年でした。



安全・安心、高品質米の生産を目指して！異常気象に負けない「丈夫な稲づくり」を実践!!

#### 3. 令和7年産米「ステージ別」水稻生育の経過

① 播種～育苗期 「一時的な高温・寡照」 ⇒苗質の「軟弱化」	【播種盛期：4/14】育苗期間である4~5月の天候は、平年と比較して日照時間が短く、軟弱気味の苗質となる傾向にあった。4月第4半旬には一時的に気温が高い日が続く、ヤケ苗・ムレ苗の発生した地域もあった。本田作業では4月の降雨日が多く、水田が乾かず耕耘~代かき作業が遅延するもあった。→ 苗質：軟弱
② 田植期 ～分けつ期 「強風・一時的な低温」 ↓ “初期生育の停滞”	【田植盛期：5/8】苗の活着はやや遅れ、5月10~11日に発生した強風及びその後の一時的な低温により生育停滞した。6月中旬からは高温・多照の気象傾向により初期生育の遅れは回復しつつあったが、地温上昇に伴うワキの多発生により生育が阻害され、目標茎数確保までの日数を要したため、中干し開始は平年よりも遅い傾向となった。(中干し開始平年比：遅い) → 5月末のコシヒカリの稲姿… 草丈：やや短い、茎数：やや少~並み、葉数：やや遅い
③ 最高分けつ期～ 幼穂形成・出穂期 「高温・多照」 +「少雨・渇水」 ↓ “栄養凋落”	6月第4半旬から8月第1半旬は過去に例の無い高温気象により、水稻の生育は急速に進展し、6月末時点の葉数は平年より2日程度早い進みとなった。7月上旬も気温の高い気象傾向が続いたことで、早生・中生・晩生ともに「平年より2日程度早い出穂期」予想となった。栽培管理面では6月中旬から続いた異常高温下における稲体消耗で葉色が大きく低下(栄養凋落)し、また少雨による渇水の影響も相まって、出穂期前の葉色は過去最も淡い状況(生育調査地点の葉色値が30を下回る)であった。 → 6月30日の稲姿… 草丈：長い、茎数：やや少ない、葉数：やや早い、葉色：並み
④ 出穂・開花期 ～登熟期間 「登熟期間の高温」 +「出穂のばらつき」 ↓ “背白・心白粒” “整粒不足”	8月第2~3半旬は降雨が続き、稲体の生育維持に繋がったが、登熟期間の前半(8/2~8/22)は高温気象(高温障害を招く平均気温26.0℃を上回る平均気温27.4℃)が続いた。特に早生品種や出穂の早いコシヒカリでは高温障害により、背白粒・心白粒の発生が助長された。ワキの発生や渇水の影響により生育停滞を受けたほ場では、その後の高次分けつ(遅れ穂の発生)により穂数は補完されたが、形質が揃わず、出穂のばらつきが多い傾向となった。→ 7月30日の稲姿… 草丈：長い、茎数：並み、葉数：並み、葉色：淡い
⑤ 成熟期～収穫期 「収穫期の多雨」 ↓ “収穫遅延”	登熟期間における「高温」の影響により品種を問わず登熟・成熟が早まり、早生は8/20頃、中生については9/6頃が収穫始期となった。中生の収穫盛期を迎えた9月中旬以降は、日中は晴天であるものの夜間に降雨が発生する傾向にあり、収穫作業が遅延したほ場もあったが、10月下旬には収穫終期を迎えた。

#### 4. 地域別格落理由表：コシヒカリ (2等級以下・CE除く)

【単位：60kg個(%比率)】

順位	さんとう地区全体	寺泊・和島	出雲崎	三島・与板	こしじ
1等比率	57.4%	66.4%	20.8%	61.7%	44.8%
1位	除青未熟	除青未熟	除青未熟	除青未熟	背白粒
	14,351 (58.1%)	5,222 (47.9%)	4,862 (89.4%)	3,507 (81.3%)	2,618 (64.9%)
2位	背白粒	背白粒	部分カメ	背白粒	除青未熟
	6,369 (25.8%)	2,939 (26.9%)	332 (6.1%)	697 (16.2%)	760 (18.8%)
3位	心白粒	心白粒	心白粒	部分カメ	心白粒
	2,177 (8.8%)	1,803 (16.5%)	123 (2.3%)	50 (1.1%)	251 (6.2%)

◆1 さんとう地区全体のコシヒカリ格落理由：第1位は「除青未熟」、第2位は「背白粒」

◆2 全ての地区で「背白粒」が増加しており、管内は出雲崎を中心に渇水による影響が大きかった。

→8月第1半旬までの異常高温・少雨により生育異常(下葉の枯上がり、穂の出すくみ、枯死等)により収量が減少した。また生育異常の発生した稲において、降雨後に二段穂が発生した。

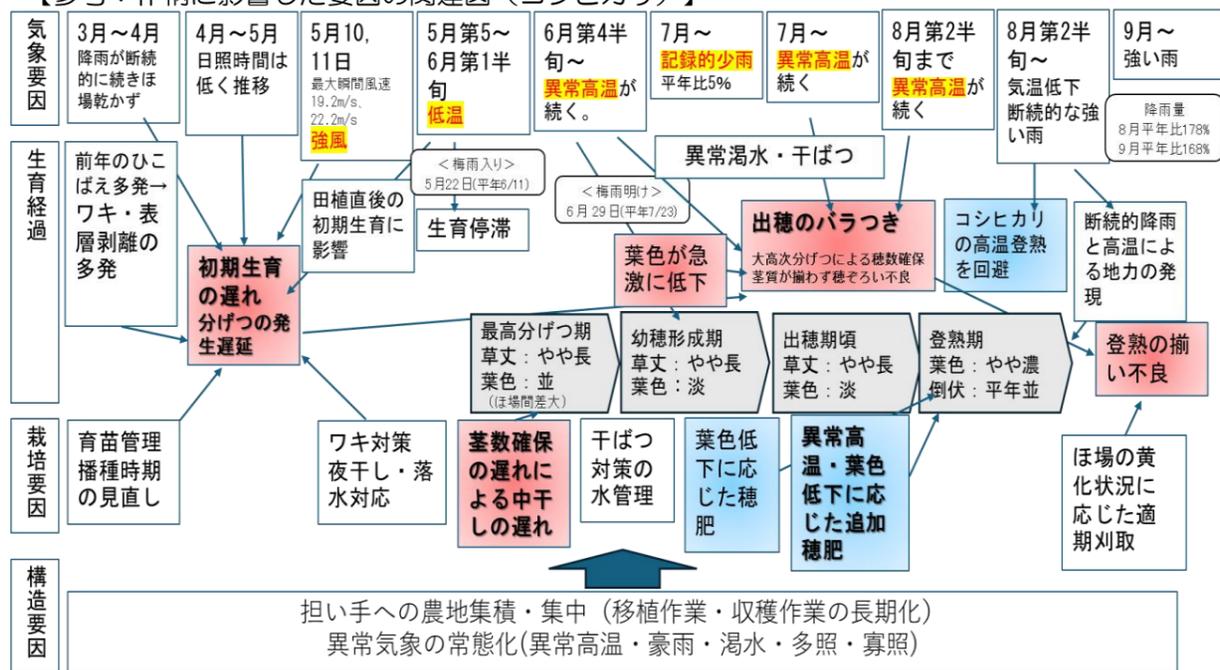
コシヒカリ・こがねもちでは、出穂期頃~10日の異常高温によるくさび米(高温ストレスから玄米表面に亀裂が入り、黒く変色)が多発した。また海岸線・山間部の一部地域で大型カメムシが発生した。

5. 令和7年産コシヒカリの品質に影響を与えた要因 ○：プラス要因 ●：マイナス要因

(1) 品質に影響を与えた「気象的要因」

- 1 移植後の低温と6月中旬以降の急激な気温上昇→移植後の低温による初期生育不良、その後の高次分けつ(遅れ穂)の発生により穂揃いが悪く、登熟も揃わず登熟不良となった。→除青未熟粒・心白粒の発生助長
- 2 登熟期間中の高温→早生の出穂期～登熟初中期(7/17～8/6:平均気温29.7℃)、コシヒカリの出穂期～登熟初中期(8/2～22:平均気温27.4℃)では高温障害の発生が助長される「平均気温:26.0℃」を超える高温気象だった。→背白粒・基部未熟粒の発生助長
- 3 8月中旬以降の断続的降雨→コシヒカリ出穂後の8/6以降は断続的降雨と気温低下により、高温感受性の高い期間(出穂後10～13日)の高温登熟を回避した。→整粒歩合の向上
- 4 6月第4半旬～8月第1半旬までの高温・無降雨・干ばつ→連続無降雨(7月の降水量:平年比5%)により渇水の影響を受けた地域では、稲の枯れ上がりや遅れ穂等による穂揃い及び登熟の不良が発生し、品質に多大な影響を受けた。→不稔粒・除青未熟粒の発生助長

【参考:作柄に影響した要因の関連図(コシヒカリ)】



長岡農業普及指導センター作成資料引用

(2) 品質に影響を与えた「技術的要因」

- 1 前年ひこばえが多かったほ場では、ワキの多発生が初期生育に影響を与えた。特に6月中旬以降の気温上昇に伴い発生が顕著となり、夜干しや落水対応が十分に行えなかったほ場では分けつの発生遅延を招き、遅れ穂の発生・登熟のばらつきを助長した。→除青未熟粒・心白粒の助長
- 2 幼穂形成期後に高温に伴う急激な葉色低下が散見されたが、追肥または3回目穂肥の実施は葉色の維持・回復に寄与し、後期栄養確保に繋がった。→整粒歩合の向上

令和7年産米の課題を踏まえて・・・

【春先からのスタートダッシュが重要!!】

- 1 苗質向上: 軟弱徒長・老化苗は×⇒健苗育成で初期生育の確保
- 2 還元リスク軽減: 早期分けつの確保⇒秋耕実施、稲わら腐熟促進剤、鉄資材の補給
- 3 適切な水管理: 丁寧な畔塗、代かきで漏水対策⇒適正生育量確保に向けた水管理(長期湛水×) 上記とあわせて「後期栄養の確保に向けた技術対策を継続!!」

R8 さんとう地域「品質向上・収量確保に向けた重点技術対策」

<重点技術> 1 土づくり本田準備 2 初期生育促進 4 後期栄養の確保

技術項目	基本技術
1 土づくり本田準備	①ケイ酸を含む土づくり資材や堆肥を積極的に施用する。特に、低地力ほ場では積極的に施用し、土壌の改良を図る。 ②稲わらの秋すき込みは、できる限り気温の高いうちに行い腐熟を促進し、次年度のワキ発生等の障害を軽減し、地力(窒素供給量)の向上と物理性(保水力)の改善を図る。 ③作土層から十分に養分や水を吸収するため、更新15cmを確保する。 ④生育の均一化や除草剤の効果安定のため、ほ場の均平に努める。
2 初期生育促進と良質茎確保	①良質茎の早期確保のため、苗質向上と老化苗防止のための適期移植を行う。 ②育苗期の気温の上昇を加味し田植時期に合わせた適期播種を行う。 ③品種・作期に合わせた播種量・栽植密度を設定する。 ④適切な温度管理で健苗を育成する。 ⑤コシヒカリは、出穂期が8月5日以降となるよう播種を行う。 ⑥春作業の遅れ等で苗の老化が懸念される場合は、確実に弁当肥を施用する。また軟弱徒長苗とならないように温度管理を徹底する。 ⑦活着後は、浅水管理により分けつを促進する。 ⑧前年多雨によりほ場が乾かず、秋耕ができなかった場合は、ワキの発生リスクが高まるため、適切な水更新を実施する。
3 適期中干しによる適正な葉色・生育量確保と倒伏防止	①移植後の気象と生育を確認しながら、本格的な梅雨前に地固めを行う。 ②移植後25日に茎数を確認し、目標穂数の70%を確保したら(遅くとも移植後30日までに)中干しを開始し、溝切は必ず行う。 ③中干しは、遅くとも出穂1ヶ月前までに終了する。 ④指標値を参考に栽培管理を行い、特に倒伏防止のために葉色管理を徹底する(葉色が必要以上に高くないよう、基肥や中干しの強さをほ場条件に応じて加減する)。
4 生育診断に基づいた後期栄養の確保と水管理	①1回目の穂肥は、粒数確保と倒伏防止のため、生育診断を実施する。 ②2回目以降の穂肥は、後期栄養を維持するため生育診断に基づき確実に実施する。 ③全量基肥肥料を使用したほ場も、葉色が低下した場合は生育診断に基づき追肥を実施する。 ④登熟期間は飽水管理を徹底し、地力窒素の吸収を促す。 ⑤落水期は、出穂期25日後以降とする。 【異常気象への対応】 ・高温が予想され、2回目の穂肥施用後も葉色が低下した場合は診断に基づき追加穂肥を実施する。全量基肥肥料を使用した場合も施用する。 ・フェーン発生時等の異常高温が予想される時は地域の水利条件に応じて、夜間の温度を下げるための水管理を行う。 ・高温登熟時は、可能な限り遅くまでかん水を継続して土壌水分を保持する。これが困難な地域はかん水可能期間の終期に十分湛水する。
5 適期収穫と適正な乾燥調製の徹底	①出穂後の気温経過と気象庁が発表する1か月予報等を参考に、8月中ごろまでに刈取計画を立てる。 ②出穂後の積算気温を参考にし、もみの黄化率を確認して適期に収穫する。 【異常気象への対応】 ・早めに収穫を開始し、刈遅れによる品質低下を防ぐ。 ・乾燥速度を落として、胴割粒の発生を軽減する。
6 病虫害防除の徹底	①カメムシ類による斑点米の発生を防止するため、畦畔・農道と水田内の雑草管理を徹底するとともに加害種と発生時期に対応した薬剤防除を実施する。 ②コシヒカリBL: いもち病多発生地においては、育苗箱施用剤等による葉いもち防除を必ず実施する。コシヒカリBL以外の品種: 育苗箱施用剤の活用と葉いもちの早期発見、早期防除に努めるとともに、穂いもちの予防防除を徹底し、穂への感染を防ぐ。 ③イネ墨黒穂病: わたぼうし・ゆきみらい→多肥栽培の是正、本田予防防除の徹底、適期収穫・適正乾燥調製により製品への混入を防止する。

〜営農情報のお問い合わせは、お気軽に最寄りの営農センターへ〜

